

# わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第187号

イザヤ 65:1

平成23年4月29日

イスラエルの人たち。このことばを聞いてください。神はナザレ人イエスによって、あなたがたの間で力あるわざと不思議とするしを行われました。それらのことによって、神はあなたがたに、この方のあかしをされたのです。これは、あなたがた自身をご承知のことです。あなたがたは、神の定めた計画と神の予知とによって引き渡されたこの方を、不法な者の手によって十字架につけて殺しました。しかし神は、この方を死の苦しみから解き放ってよみがえらせました。この方が死につながれていることなど、ありえないからです。ダビデはこの方について、こう言っています。『私はいつも、自分の目の前に主を見ていた。主は、私が動かされないように、私の右におられるからである。それゆえ、私の心は楽しみ、私の舌は大いに喜んだ。さらに私の肉体も望みの中に安らう。あなたは私のたましいをハデスに捨てて置かず、あなたの聖者が朽ち果てるのをお許しにならないからである。あなたは、私にいのちの道を知らせ、御顔を示して、私を喜びで満たしてください。』

兄弟たち。父祖ダビデについては、私はあなたがたに、確信をもって言うことができます。彼は死んで葬られ、その墓は今日まで私たちのところにあります。彼は預言者でしたから、神が彼の子孫のひとりをして彼の王位に着かせると誓って言われたことを知っていたのです。それで彼のことを予見して、キリストの復活について、『彼はハデスに捨てられず、その肉体は朽ち果てない』と語ったのです。神はこのイエスをよみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です。ですから、神の右に上げられたイエスが、御父から約束された聖霊を受けて、今あなたがたが見聞きしているこの聖霊をお注ぎになったのです。ダビデは天に上ったわけではありません。彼は自分でこう言っています。『主は私の主に言われた。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまではわたしの右の座についていなさい。』ですから、イスラエルのすべての人々は、このことをはっきりと知らなければなりません。すなわち、神が、今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。使徒の働き 2:22-36

神の存在を証明するようにと挑まれることが往々にしてあります。このような挑戦は、神がご自身を顕されないことに起因するのではなく、神がご自身を顕されても人がそれを認めないことによるものですが、このことを訴えても無神論の立場を取っている人たちを納得させる答えにはなりません。しかし、気づかなくても存在しているものがあることはだれしも認めざるを得ないでしょう。たとえば、人は何千年の間エネルギーの存在さえ知らずに過ごしてきたのですが、全宇宙は初めからエネルギーで構成されていました。また、もし神が、限らない可能性を秘めた「人」、一生まれ持ったすべての機能を完全に発揮できるか否かは別問題として一を造られた創造者であるとすれば、神は無機的、非人間的な存在であるはずがなく、人と同じように感情を備え、思考、意志のある方に違いありません。目を大自然に転じると、すべてが精巧で一貫したデザインの下に造られていることには驚かされます。自然界は完全な秩序によって保たれています。「神の定めた計画と神の予知」、計り知れない知恵と力は確かに宇宙、大自然に反映されており、造られたすべてのものの背後にデザイナーの存在、一創造者一を想定せずに、なぜこれらすべてのものが一定の秩序の下に存在しているかの説明をすることはできないのです。造られたもの、造られた方という線引きをするとき、前者は、はかない人の寿命に比べれば永遠に見えても、しかし、果てがあり、やがては朽ちるもののすべてです。昨今の物理学、天文学は、これまで不変だと思われていた光速はじめすべての現象、太陽も月も星も地球も永遠ではないことを明らかにしていますが、聖書は初めから、創造者なる神以外のものはすべて被造物、一造られたもの一で、やがて朽ちることを主張しています。宇宙が結果として人間を生んだのではなく、宇宙の目的が初めから人間を生むことにあったという「人間原理」は、神を信じない科学者たちによっても支持されていますが、これはまさに聖書の主張です。神は天地を人が生きるにふさわしい状態に整えられたのです。しかしこの現今の宇宙もこのままでは、言い換えれば、罪が招いた「滅び」を打ち砕く神の新しい創造が起こらないかぎり、すべて消失することになるのです。

人にとって神の存在、神のご計画を知ることは難しいことでしょうか。もし神が人との関わりを通してご自分の御旨を知らせたいと思っておられるとしたら、神は人に対してどのようなアプローチを取られるでしょうか。天から大きな声で人に話しかけられるかもしれません。しかし、それが神であることを人はどのようにして知ることができるでしょうか。超自然的な力あるわざで近づかれたとしたらどうでしょう。しかし、人はそれを単なる自然現象とみなしてしまうかもしれません。それでは、神ご自身が人として地上に来られたとしたら…。あるいは、この世の者とは思えない出で立ちで来られたとしたら…。しかし、それが神であると、人はどのようにして知ることができるでしょうか。奇蹟、現象だけでは人に神を知らせることはできないのです。

この世の宗教には大なり小なり経典があり、他宗教との共通した教えも含まれています。たとえば、貧しい者への愛の施し、助けを必要とする者への慈しみを説いたキリストの教えは中国を経て日本に伝えられ、仏教の教えとして広められたことが古代文書を通して明らかになっていますが、このように、諸宗教に共通している教えの源をたどることによって、どの教えが一番古いのかを知ることはさほど難しくありません。しかし、この世にはいろいろな意見があるもので、イスラム教は更新された予言に一番信憑性があると信じて譲らない立場に立っています。ヤーヴェ信仰、キリスト信仰よりはるか後世、西暦七世紀に設立されたイスラム教のアラーの神の正当性を擁護するには、最後の予言者ムハンマドの権威をイエス・キリスト以上にする方便が必要であったということでしょうか。この世は理屈を好みますが、しかし、唯一真の神の正典である聖書には、他の宗教書が並ぶことのできない決定的な違いがあります。それは、神の預言の言葉とその言葉が後世どのようにして成就したかの長期にわたる歴史がともに同じ聖書に記されているということです。冒頭に引用した箇所は、その一例、ダビデによるメシヤ預言、一キリストの甦りの成就のくだりです。「彼らのうちのだれが、このことを告げ、先のことをわれわれに聞かせることができようか……わたしより先に造られた神はなく、わたしより後にもない。わたし、このわたしが、主であって、わたしのほかに救い主はいない」「だれが、わたしのように宣言して、これを告げることができたか。これをわたしの前で並べたててみよ。彼らに未来の事、来るべき事を告げさせてみよ」（イザヤ書 43 : 9, 44 : 7）とイザヤは比類ない神の卓越性を語りました。人の編み出したこの世の宗教が真似することのできない預言の正確な成就の記録に加え、まだこれから実現することになる数々の預言を明確に記録している書は聖書をおいて他にないのです。主権者なる神は、偶像崇拜、異端の神々崇拜を悪霊崇拜として厳しく禁じられましたが、使徒パウロは妥協的な信仰生活に陥っていた初代教会時代の信徒たちに、歴史から教訓を学ぶようと、モーセの時代エジプトから紅海を渡って贖われた者たちの荒野での滅びの例に言及して、「偶像の神に……彼らのささげる物は、神にではなく悪霊にささげられている、と言っているのです。私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません」（コリント人第一 10 : 19- 20）と、真の神への信仰に妥協がありえないことを明確にしています。神の真理から離れるとき、それはすべて悪霊との関わりになるのです。

旧新約両聖書は「人」として地上に来られた神、イエス・キリストを証した歴史書であり、預言書です。キリストのご降誕は神ご自身によって、また預言者たちによってはるか古代から告知され、考古学的、歴史的に立証されているキリストの生涯、宣教、十字架刑による人類の罪のための犠牲の死、埋葬、空の墓、甦りの事実に至るまで人知を越えた出来事が聖書に記録されています。これだけでも聖書が神の靈感によって記された書であることを証しているのですが、さらに、甦られたキリストが再びこの世に戻ってこられるという、他の宗教書にはどこにも記されていないような驚くべき預言が公約されています。世界の主な宗教の教祖たちの中でだれ一人として、空の墓、甦り、再臨の約束を公言することのできた者はおらず、みな死んだ後葬られ、今は黄泉で一般の人たちと同じように、神の「大きな白い御座」の前で生涯の言動の申し開きをすることになる「裁きの日」を待っているのです。キリストのユニークさは、キリストに対する聖書の主張をそのまま受け入れるとき初めて、私たちの霊を覚醒させ、人生において「どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです」（ルカ 10 : 42）という真理に開眼させてくれることです。キリストは「なくなる食物のためではなく、いつまでも保ち、永遠のいのちに至る食物のために働きなさい。それこそ、人の子があなたに与えるものです。この人の子を父すなわち神が認証されたからです……あなたがたが、神が遣わした者を信じること、それが神のわざです」（ヨハネ 6 : 27, : 29）と、イエス・キリストによる罪からの解放、滅びからの救いを信じ、この世の人生において神を第一優先とする信仰の歩みをし続けていくことが「どうしても必要なこと」とであると言われたのでした。

真の神は、創造以来ずっと人間史に関わって来られたことを聖書を通して語られました。神がイスラエルをご自分の民としてまず選ばれたのは、契約の民に対する懲らしめと恵みの記録を通して、ご自身と御旨を世に顕し、神がイスラエルに対してだけでなく、全人類に対しても大きなご計画を持っておられることを知らせるためでした。世界中に満ちている偽りの神々は未来を正確に告げることができないばかりか、現在に至るまでの全歴史にどのように関与してきたかも立証できないのですが、聖書は30%が預言で占められており、焦点はイスラエルとメシヤ（キリスト）に置かれています。神が全世界、全世代に与えられた「しるし」は「イスラエルの民」と「約束の地カナン（今日のパレスチナ）」で、世界中が注目する中で、今日神がイスラエルをどのように扱っておられるかは、まさに聖書に預言されていることの正確な成就になっています。イスラエルが神との契約を忘れ、自分勝手な道を歩むなら「わたしが与えた地から、彼らを根こぎにし、わたしがわたしの名のために聖別した、この宮をわたしの前から投げ捨て、これをすべての国々の民の間で、物笑いとし、なぶりものとする」（歴代誌第二 7 : 20）と告げられた神の言葉はすでに成就しましたが、今日まだ、この絶望的な状態からのイスラエル復興の預言は完全には成就していません。しかし昨今の世界情勢は「わたしがわたしの大いなることを示し、わたしの聖なることを示して、多くの国々の見ている前で、わたしを知らせるとき、彼らは、わたしが主であることを知ろう」（エゼキエル書 38 : 23）という神の御旨が究極的に成就するときの非常な接近を指し示しています。